

水産研究のフロントから

ヨーロッパ養殖会議 2005



大会初日の基調講演の様様

ヨーロッパ養殖学会 (Aquaculture Europe 2005) が 2005 年 8 月 5～9 日にノルウェーのトロンハイムで開かれ、40 ヶ国から 380 名の参加があった。会議を通じた全体テーマとして、“Lessons from the past to optimize the future” が提起され、特に「持続的な経済活動と環境保全、および倫理」の立場から 2 件の基調講演が行われた。最初の基調講演では、B. Myrseth 氏 (ノルウェー Marine Farms 社) が「種苗生産技術を確立してきた魚種：今後さらに何を改善して新魚種の飼育技術開発を行うべきか？」について講演し、引き続き、A. Le Breton 氏 (フランス Fish Health Consultancy) が、「持続的養殖業における魚の健康管理」について講演を行った。

口頭発表は 3 会場で行われ、1) 環境に優しい養殖システム開発、2) 安定的種苗生産、3) 魚病、4) 持続的漁業活動に対する養殖業の貢献、5) 養殖技術倫理、6) 養殖魚の成長と環境収容能力、7) 持続的な飼料原料、8) 持続的な経済活動としての養殖業の将来、の 8 セッションで計 93 件の口頭発表があった。また、事前審査を経た 111 点のポスター発表があり、会期中の夕方にワインを片手にしたセッションが行われた。他に EU が主催している研究プロジェクトやネットワークに関する

フォーラムもあった。

今回参加して特に印象に残ったことは、“environment-friendly aquaculture” など、近年普通にキーワードとして使われている用語に加え、“fish welfare” や “ethics” という用語が頻繁に現れたことである。畜産業では、「畜産動物の福祉」に対して多様な検討が行われ、過密飼育の問題や、屠殺場への輸送時の条件、屠殺法などが畜産動物へのストレスに与える影響が問題として取り上げられ、その指標として動物の行動や生理状態に現れる変化が研究対象となっている。この概念は、活魚が重視される日本特有の食文化では異なる価値観で捉えられると思われる。ただ、魚の健康状態、行動、ストレス、環境条件、化学物質の使用等の相互作用のもとに、食品としての安全性や質の問題と動物愛護の立場からの消費者の姿勢が複雑に関わっていることであり、それは世界共通の問題として認識すべきことも事実であろう。

例年通り、学会最終日にはワークショップが開催された。今年のテーマは「天然サケと養殖サケ：両産業の連携」と「循環式養魚システム」の 2 件であった。

さらに水産養殖分野で世界最大の展示会である Aqua Nor が、本学会終了直後の 8 月 9 から 12 日にかけて開催された。この展示会は 1979 年に始まり、今年は 18000 平米の巨大な会場で合計 412 点の展示があり、約 2 万人が集った。大変な盛況であったが、日本企業の出展はほとんどなかったことが残念に思われた。

この学会を始め、世界養殖学会 (WAS) やカナダ、オーストラリアの国内養殖学会を始め、欧米の養殖学会にはほぼ毎年参加してきたものとして思うことは、これらの欧米の学会の大きな特徴は研究者と民間の種苗生産技術者が一同に会して意見交換を行うことである。日本国内では、飼料や機材を供給する会社を別にすれば、養殖業や種苗生産業に従事し、実際に魚の生産に携わる民間技術者の出席と発言が学会活動の中では不在である点が以前から気になっていることである。このことにはいろいろな事情が内在していると思われるが、大学や公的機関で研究活動に取り組む立場からすれば、海洋生物学研究としての興味を満たすのみならず、日本の水産業振興への貢献としての一環として、少しでも種苗生産業や養殖業界にプラスとなるような知見の提供、伝達を積極的に推進しようとする姿勢が不可欠であり、そのためには日常からの民間技術者との交流が重要であると思う。

(長大院生産科学 萩原篤志)